木活プロジェクト研究月報

http://www.u-gakugei.ac.jp/~w-woods/

Vol.39

■2007August■

学校外の工作で生まれる子どもと木の関わり
…千村裕子/土ようのたまり場 代表
ベンチがつなぐ人と自然
雑穀展ブローチ作りワークショップ
Design Report From Sweden

学校外の工作で生まれる子どもと木の関わり

千村裕子 Yuko CHIMURA／土ようのたまり場 代表

小中学校で図工・美術の教職経験がある千村さんは、現在小金井市で『土ようのたまり場』という親子の工作や遊びの活動を行っている。今回は学校教育外の工作活動の中で生まれる、子どもと木材の関わり方について、実際の活動にお邪魔してお話を伺った。

『土ようのたまり場』は平成14年度の完全週5日制の導入をきっかけに、休日の子どもの居場所を確保するために、現役を退いた立場からできることとして始めたそうだ。毎週土曜日に希望者を集め行っているサークルのような活動である。内容は工作や手芸といったモノづくりからゲームなど遊びまで、主に小学生とその保護者が生き生きと参加している。

活動場所である小学校の図工室を眺めながら、「最近の図工や美術には問題があるんじゃないかしら。」と苦笑する千村さん。学校現場での図工・美術は、制限された少ない時間の中で子どもの制作活動の可能性も限られてしまっているのが残念だと話す。そこで『土ようのたまり場』で工作をする際には、ゆったりとした時間の中で、存分に自由な制作をできるのが魅力のひとつだという。また材料も豊富に用意し、たっぷり確保された時間の中で子どもが好きに選んで使えるように、端切れや中途半端な使いかけの材料も大切に保管し毎回使いまわしているそうだ。今回取材に伺った5月27日の木工教室でも、大工さんも唸るほどの良質な木材を２～３mの長いまま大量に用意し、参加者に好きに選ばせていた。参加者は大量の木材をじっくり見て選びながら、自由にあれを作ろうか、これを作ろうかと自分の制作意欲と向き合う。

今回木材は、あえて大きいまま用意し子どもたちに運ばせたのだそうだ。小さな体で必死に木材を運ぶ中で、木の重み、厚さ、手触り、香りを子どもたちに感じ親しんでもらいたかったという。活動の終盤で「木材は好きなだけ持って帰ってもいいですよ。」と参加者に声をかける千村さんの姿に、子どもの自由なモノづくりを推し進める意気込みと大きなゆとりを感じた。(竹之内)

多くの木材の中から自由に選び自由に発想する子どもたち。

ベンチがつなぐ人と自然 学芸大キャンパス内の木のベンチ

学芸大学の敷地内に、最近木製のベンチが設置されました。設置された場所はもともと木が生い茂り、あまり人がゆっくりできる場所ではなかったのです。しかしその空間の整備と共にベンチが設置され、多くの人が集まる場所になりました。今回、このベンチを利用している大学生に話を聞き、ベンチができたことによる効果を考えてみました。

今回インタビューに応じてくれたのは、晴れた昼下がりに楽しそうに食事をしていた女子学生の3人グループ。この木のベンチがいつから設置されていたのかは分からないが、晴れた日は昼食などを食べによく利用しに来ているという。「木が生い茂っていた前の場所も好きだったけど、こんなふうに座る場所ができたのはよかった。学芸大学は敷地が広いのに、座る場所が外には少ない。自然も多くてロケーションもいいのに、そのロケーションをゆっくり味わうことができる場所はほとんどない。」と、屋外に憩いの場所を求めているのが伝わってくる。「昼食は午後の授業の教室で食べなくてはならないときもあるけれど、晴れているのに室内はいやだ。」と話す彼女らは、学内の農園(環境教育の実習園)や野球場にある他のベンチを利用することもあるという。

学内でベンチを利用するとなると、講義棟からだいぶ歩かなくてはならないが、それでも晴れているときは、外の自然や木漏れ日を感じる場所でゆっくりしたいそうだ。インタビューに答えてくれた3人とも、口々に「こういった自然を感じることができる共有スペースを増やしてほしい。ベンチをもっと作って！」と話す。そして今回利用していた木のベンチに関しては、「屋外にあるというだけではなく、木でできたベンチそのものからも自然のぬくもりを感じることができる」と付け加えた。

インタビューをしている間も、周囲にはベンチを利用する学生たちが行き交っていた。日常の中でも自然とのふれあいを求めている人の心を感じるとともに、ベンチを設置したことによって自然を体感できる場が生まれることを知った。(野村)

環境整備のために学内で伐採したヒノキ材が生まれ変わったもの。